



代表取締役社長
角谷 建輝知 さん

角谷さん自身もたまに顔を出しますが、子どもたちにわかさ生活の社長であることは一切明かしていません。「いつもなぞなぞを出すので、子どもたちから『なぞなぞ博士』と呼ばれています（笑）」

支援活動はこうしたレクリエーションやイベントだけにとどまり

『あたりまえ』から始まった、児童養護施設の子どもたちへの支援。

「ブルーベリーアイ」をはじめとするサプリメントでおなじみの株式会社わかさ生活は、お客様との交流を大切にしている営業姿勢で幅広いファンを持つ企業です。同社は創業当初から被災者支援や盲導犬育成支援など、数々の社会貢献活動に取り組んでいます。今回はその活動の一つである児童養護施設への支援活動について、代表取締役社長の角谷建輝知さんにお話を伺いました。



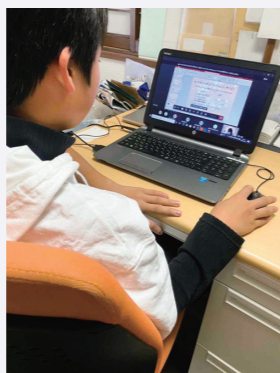
我ら、
企業市民

株式会社
わかさ生活

「当社の児童養護施設支援は、できる範囲で、やりたい人がやるという形で行っています。永続的にできるかは分かりませんが、従業員が自らの目で児童養護施設を見て、子どもたちと交流することで、



▲お金の勉強会



▲パソコン教室

ません。コロナ禍ではオンラインによるパソコン教室も開催されました。また、「卒業後、子どもたちがお金のトラブルに巻き込まれることが多い」と施設の職員から相談を受け、金融教育の専門家を招いた「お金の勉強会」も実施。さらに、子どもたちの将来を見据えて高校生を対象にわかさ生活でのインターンシップも実施しています。

社会貢献はできることから 続けていくことが大切



▲子どもたちから贈られたメッセージ

「こうした活動を続けているのも、児童養護施設を卒業した子どもたちが、今度は困っている子どもたちを助ける大人になってほしいという思いからです」
最後に、児童養護施設支援をはじめとする様々な社会貢献活動にかける思いを伺いました。
「少なくとも10年は続けようという思いで始めた活動が、今年で

自分たちの社会的責任への向き合い方や方法を自ら考える学びの機会となり、会社にとっても成長につながっていると考えています」
その結果、中には仕事終わりに施設を訪れ、子どもたちの家庭教師をしている従業員も。「ときには私が子どもたちに仕事の悩みを聞いてもらい、励まされることもあります」と語る人もいます。

娘の友達との出会いが 全ての始まりだった

株式会社わかさ生活が児童福祉施設の支援活動を始めたきっかけは角谷さんの体験からでした。「当時、中学生だった娘の友達に家に遊びに来ていたのです。なんでも身近に自分を使えるパソコンがなく、宿題のために娘のパソコンを借りて来たとのこと、とても礼儀正しい子でした。後に彼女が児童養護施設で生活しているということを聞きました」と角谷さん（以下、同）。

「児童養護施設には子どもたちが使えるパソコンがない」ことが心に引っかかっていたとのこと。数年後、わかさ生活は本社を大阪府高槻市から、現在の京都市四条烏丸に移転。それに伴い不要となった、まだ新しいパソコンや傷・汚れのない使用可能な机や椅子などをどこかに寄付しようと思いましたが、そこで、真っ先に児童養護施設が心に浮かんだそうです。

そこから、ある児童養護施設のお付き合いが始まりました。その施設長によると、国や自治体から運営資金が賄われているものの、資金繰りはかなり厳しい状況だったそうです。角谷さんは支援を申し出ました。それは角谷さんにとって『あたりまえ』の感覚から

でした。

「私自身も貧しい少年時代を過ごしました。さらに目にハンデを抱えています。周囲の人々の支えがあったから、ここまでやってこられた、という実感があります。だから会社が利益を出せるようになるれば、できる範囲で社会に恩返しをしようという思いがあります」

わかさ生活は創業5年後の2003年から、商品をお客様が一つ買われるごとに1円を「一縁のeye基金」に積み立て、同社の社会貢献活動に活用してきました。角谷さん自身が尼崎で阪神淡路大震災を体験したことから始めた活動は、国内外で発生した地震など数々の自然災害の被災者への寄付や物資援助、従業員による現地ボランティア、視覚障がい者京都マラソン大会への協賛と運営支援など、広範囲にわたります。

子ども時代の思い出を 将来を生きる力に変えて

児童養護施設支援では当初、一つの施設を対象としていましたが、後に対象を京都市内5園、兵庫県丹波市内1園に拡大しています。

「子どもの頃の楽しい思い出は、子どもたちが施設を卒業した後、25年を迎えようとしています。何か特別なことをやっているつもりはなく、『あたりまえ』のこととしてやってきたから続けてこられた。もちろん経営に影響のない範囲ではありますが、こうした活動は、やり続けていくことに意味があると思っています。そのために、私たちは更に人々に認められながら、成長を続けなければなりません。今後とも消費者の皆様、そして本社を置く京都市民の皆様から愛される企業になれるように努力していきます」
児童養護施設の子どもたちやサポートを要する人々への支援を『あたりまえ』のこととして実践されている姿が印象的でした。



プレゼント

本誌への御意見・御感想を送ってくださった方に

『ブルーベリーアイ』をプレゼント!

応募方法についてはP3 プレゼントコーナーを御覧ください

※応募者多数の場合は抽選となります。